



五

歳になる孫の話である。朝起き出して、母親に、「ゆめで目にきくくすりをかっただい。おれんじいろいろのいれものやつ。目がよくなつた」と言った。母親にしてみれば「ふーん」というだけの話である。ところが、そばでそれを聞いていた父親がたまげて言うには、会社の帰りに目がチカチカするので薬局に寄って目薬を買って求めた。それがオレンジ色の容器だった。孫はそのことを知りもしないし、見てもいないのだ。

心理学でいう共時性(シンクロニシティ)の一種かと思うが、個人の境界というのは自分が思うほどくつきりとはしていかなくて、意識などは身体を飛び越えて人や物などどけつこう行き来しているのかもしれない。孫の話の偶然とたたづげるより、そう考えた方が納得できる。

昨日は、今年最後の落語の稽古だった。たまたま塾生三人合同ですることになったのと、見学希望の子どもたちも来たので、常連のお客さんも合わせて、椅子も座布団も全部使つての大入り満員となった。とはいえ狭小住宅なので人数はしれているのだが、それでも肩寄せ合つて老若男女が笑い興じているのを見ると、

すっかり寄席だし、かつてイメージしていたことなので、これも孫の夢と同種の現象ではないかという気がしてくるのだ。つまり、ぼくのイメージしたことが(それはぼくではないだれかのイメージだったかもしれないのだが)東奥谷界限に伝播して、めぐりめぐって形をなした。多くの人の手を借りねばならぬことが、しゃべつてもいないのに実現したのだから、そういうことだろうと思う。

ということは、実現するかどうかなどは脇に置いて、よさそうなことは、せつせとイメージしてみればいいのだ。ただし、孫の場合は父親、私の場合は実家という極めて至近距離の濃密な関係性の中で発生しているから、あんまり大それたイメージを抱いても効果は疑わしい。やはりここは、利他的かつ手近なところの幸せを思い描くのがほどいいものであろう。

それにしても、夢の中のこととはいえ、父親が目薬を差して、その薬効が子どもに現れたというのがおもしろい。昔、寅さんは言った。

「お前と俺は別の人間なんだぞ。早え話がだ。俺が芋食つて、お前の尻からプツと屁が出るか？」

出るかもしれない。

空き家 5

木幡智恵美

生家の行く末⑦

一旦減つていた実家を開けに行く頻度が増えたのは、退職して畑仕事をするようになってからだ。暑い時は週二度(間で水やり畑にだけ行くことも)、作業の少ない寒い時は週一回とか二週に一回とか。着替えをするし、トイレも使う。テレビを見ながら弁当を食べる。採れた作物を洗うなどの処理、豆類やオクラの種の乾燥、農具を置くなど、維持するだけの家ではなく、農作業をするのになくてはならない存在として甦った。

畑仕事は今年が十七年目。四月の大根の種蒔きに始まり、連休頃からオクラの種蒔きとウリ類、ナス、ピーマンなどの夏野菜の苗蒔き、九月になると種から育てたキャベツ、白菜、ブロッコリーの苗蒔きと大根の種蒔き、十一月はエンドウ豆蒔き、年を越して三月にジャガイモ蒔きと、毎年繰り返してきた。その間に、ピーナツや小麦に大麦、黒千石大豆なども育てたことがある。大麦は麦茶に、小麦は石臼で挽いてパンに混ぜたことも。自家製の麦茶は、色は薄い香は最高だった。ニンニク、ラッキョウをお隣さんからいただき、それは何年も育ち続けているし、エビスグサは毎年畑のどこかで芽を出し、秋に鞘にぎっしり並んだケツメイシを採り、炒つてハブ茶として毎日飲用している。

畑仕事は大半が草との闘いだ。初めの頃手こずっていたのはカヤやスギナだった。それが、カヤツリグサになり、ここ数年の天敵はワルナスビだ。これにはほとほと手を焼いている。何せ、切つたところから脇芽がどんどん広がる。根はどこまでも伸び、土を掘ると幾筋もの根が下に向かい、引き抜こうものならぶつんと折れてしまう。こちらも、年々歳を取り、草との闘いに疲れてきた。「もう、この範囲だけで作るか」「植えんところには除草剤を撒くか」などと夫と話し、耕作面積を少なめてきている。

そして、決めた。手で起こせるだけの範囲を耕し、管理機を手放すことに。先日電話で購入した先に引き取ってもらおうよう連絡すると、「二十十年に買っておられますね」と先方。そうか、もう十三年になるのか。よく働いてくれたものだ。

30代フリーター 裏金疑惑で岸田政権が退陣したとしても、野党がそれに取って代わるという予測はさすがに聞かない。

年金生活者 自民党が下野する可能性が出てくるとすれば、党が分裂し、その一方と野党が組んだときくらいだ。日本国民はこれまで、自民党あるいは自民党的なものを排除した政権を選択したことはない。

自民党が結党以来初めて下野した1993年の細川連立政権の成立は、党を割って出た小沢一郎の率いる新党の新生党が軸となった。2009年の総選挙で旧民主党が過半数を制して実現した政権交代も、その小沢が立役者だった。

それほど自民党は日本国民の間に根をおろした基軸政党であり、日本人にとって政治上の「実家」のような存在であり続けている。

30代 55年体制下の社会党は、頭の古い親に反抗して実家を飛び出した子供みたいなものか。

政党も根本に自らの理念を持って行動していないからです」と断じた吉本隆明の言葉に私は耳を傾けないわけにはいかない。彼はそう言ったあと次のように述べている。

「このままでは、中国もそのうち、かつてのファシズム国家がやったように、軍事力と経済力にものを言わせて、周辺国にいうこと聞かせるような国家になっていくことでしょう。日本が執拗に理念をもつて、相対すれば、それをくいとめられるかもしれない。日本人が保持し、世界に向けて呼びかけるべきは、やはり九条の「平和主義」なのではないでしょうか」

『文藝春秋』2011年4月号）
30代 もともと日本の政治家も政党も理念をつくるのはあまり得意ではない。「造反有理」とか「愛国無罪」とか、ことあるごとに理念を掲げる中国などと比べると、それがきわ立つ。

年金 岡本隆司の『教養としての「中国史」の読み方』によれば、広大地域差の大きい中国はそのバラバラ状態

年金 西欧の左翼思想をソ連経由で輸入し、自分たち向けに加工した社会党のイデオロギーは日本に根を持たないために、国民はそれを本気で信じることはなかった。ただ、自民党はときおりカネにまつわるスキャンダルを引き起こすので、それにお灸をすえるために、票を移動する先として社会党を選んだ。

自民党の保守イデオロギーは、左翼思想のように開明的ではなかったが、日本人の伝統的なメンタリティーに根ざしていた。社会党が国民に対して啓蒙的な態度、悪く言えば上から目線で臨みがちだったのに対し、自民党は国民の心情とできるだけシンクロナイズしようとした。

したがって、日本国民にとって、自民党あるいは自民党的なものを排除した政権を選択することは、自らのルーツを断ち切ることに、歴史に根ざしたアイデンティティーを失うことと重なって感じられると推察される。

このことは逆に言うと、自民党的なものを取り込んだ野党は強いということ。をなんとかまとめようと、ことあるごとに「一つの中国」を強調する。これもまた政治上の理念のひとつであり、それをより具体化するために、さらには様々な理念が編み出される。

そんなバラバラ状態を経験していない日本はしたがって、国内をまとめるための理念を中国ほど必要としない。しかし、日本でも、政治が前に進むときはやはり理念が威力を発揮したこと

とだ。旧民主党がそうだった。

30代 結局どう転んでも、野党は自民党頼みということか。

年金 弱小政党であっても、確固とした理念があれば、大政党もできないことを実行できる。それを示したのが、スポーツ平和党をつくったアントニオ猪木だ。

「スポーツを通じた国際平和」を掲げた彼は1990年、クウェートに侵攻したイラクが日本人41人を人質に取ったとき、バクダッドで「スポーツと平和の祭典」を開催した。それが人質の解放につながった。また北朝鮮には30回以上も出向き、スポーツイベントの開催や政府高官との交流を通じて拉致被害者の救出に向けて尽力した。いずれも政府や国会が難色を示したにもかかわらず、彼はやり遂げた。

ロシアとウクライナ、イスラエルとハマスの戦争が続き、中国が軍事的な膨張を止めない現在、「平和」を理念に掲げるのはやはりアリティーがないうように見えるかもしれない。だが、かつて「今の政治がダメなのは、どの

も確かだ。かつての自民党の「自由社会を守る」は高度経済成長政策をあと押ししたし、旧民主党の「国民の生活が第一」は政権交代の駆動力となった。

30代 いまそれに匹敵するような政治上の理念を想定することができただろうか。

年金 文句なしに挙げることができるのは「平和」だ。ウクライナや中東でおびたらしい血が流れているのを理由に、それを掲げることが「平和ボケ」と揶揄する言葉が浴びせられるとしたら、むしろこの理念の切実さを物語っている。

もうひとつ必須となる理念は、吉本隆明が「自由」「平等」と並べて提起した「相互扶助」だろう。少子高齢化の進行で、国家の再分配機能の中心をなす社会保障の制度がほころびを広げているからだ。だが、それに取って代わり得る「相互扶助」のシステムの具体的な姿を私はイメージできないという。

ニュース日記 905
中村 礼治

理念の威力